

静脩

1995年9月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 32, No.2

利用者からみた大学図書館システム

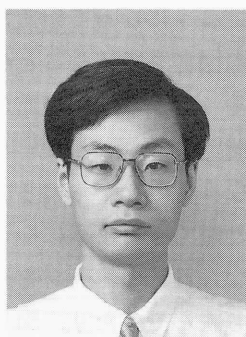
京都大学大学院工学研究科

助教授 石 原 慶 一

1. はじめに

図書館はあらゆる情報を提供する場であり大学には必須の施設である。

利用者は学生であったり、教育者であり研究者でもあるところの教官などである。最近、京都大学の附属図書館が土曜日、日



曜日も開館になりたいへん便利になった。さらに将来は自動図書館、電子図書館へと新しい形態でのサービスに期待が寄せられるところである。新しい図書館ではサービスを提供する図書館側もそれを受ける利用者側もたいへん便利になることであろう。しかし、すべての分野が新しいシステムに置き換えられるとは思えない。従って、新しい方式と旧来の方式が混在せざるを得ないのではなかろうか。ところが、利用者は一度便利な状況に慣れてしまうと今までさほど問題とも思われなかったことが非常に煩わしく感じられるのである。これらに加え、近年では必要とする情報量も増えている。このような状況下で如何に上手に情報を集めるか、また図

書館システムはどのように機能すべきかについて考えてみたいと思う。

2. 利用者と図書館

ある本が読みたいとき、まず、京都大学がその本を所蔵しているかどうかを検索する。また所蔵しているとすれば学内に60余ある部局図書室のうちどの図書室にあるかを調べる必要がある。従来なら、附属図書館の目録カードを調べなければならなかったが、最近ではOPACを利用して自分の部屋にいながらにして調べられるのでその点では便利になった。しかし、OPACで目的の本がないことがわかったとしよう。その場合本の発行年が1985年以前のはまだ目録が入力されていないので、目録カードを調べなければならない。そうして、目的の本の所蔵がようやくわかるのである。OPACに登録されているものについては目録カードがないので両方見なければならない。OPACは一見便利なシステムであるが、現状では利用者登録が必要な点、利用時間に制限がある点、目録カードとの併用、貸出中かどうかわからないなど不便さはまぬがれない。

次に、附属図書館で本を借りようとする、まずカウンターで開架図書かどうかを聞く必要がある。書庫にある場合は、昼休みは書庫にいくれずもちろん貸出もできないし、貸出時に貸出カードに必要事項を記入しなければならない。開架図書なら利用者カードを提出すれば利用者が貸出カードに記入する必要はないのだが、これになると貸出カードへの記入は煩わしい。せめて利用者カードの番号だけで済ませてもらいたいものだ。欲をいえば利用者カードを出せば掛員が請求記号を計算機入力して処理してもらえればオンラインで本が貸出中かどうかがわかって便利になる。

さらに返却時だが、閉館後は玄関前のポストに返却できるようになり便利になったが、閉館時にはカウンターまで返却しなければならない。閉館後はあくまでも緊急避難ということであろうが、閉館時のほうが手間がかかるのは事実だ。せめてゲートの外で返却させてほしい。

以上、色々と不便な点を書きつらねたが、ここで文句ばかりいうつもりはない。図書館側も予算面や人員面で苦勞されているので利用者が協力できるところはすべきであると思う。しかし、サービスを受ける側の利用者はえてして怠惰になる一方であり、便利なことになると少しでも手間ひまがかかると不便だと感じてしまう。今後、機械化が進むなかで、利用者に不便を感じさせないような図書館側の対応を切望するものである。現状において図書館が十分に利用されているかというところには思われない。あふれる情報を取捨選択して必要な情報を得るにはそれなりの技術や手法を要するが、このような技術やノウハウは個々人に死蔵されていて、なかなか一般には公開されていないということもその背景にある。附属図書館においては、新入生のオリエンテーリングや館内ツアーなどいろいろと企画されているが、これは学部学生を対象とした一般的な図書館の利用法であり、これに加えて、大学院生を対象とした研究者としての図書館利用法（文献調査法）につい

でも取り組んでいく必要がある。このような図書館利用者教育は高度化する将来の図書館システムではますます重要になり、より一層の充実が望まれる。

3. 情報洪水

最近の論文数の増加は大変なものである。コピーをとってファイルし、保存していくといくらでも増える。量が増えれば必要なものを取り出すのに多大な時間と労力が要ようになる。最近では2次情報が多く流通していて、容易に文献検索ができ、必要な書誌事項を得ることができるので、図書館でオリジナルを見るほうが手元のコピーを探すより早い。従って、図書館はできるだけ多くの種類の学術雑誌を所蔵することが望まれるのであるが、実際には新しい学術雑誌の出版に図書の購入が追いつかないという点や経費節減のため各図書室の蔵書が重複しないようになっているため、必要な雑誌を一か所の図書室で読むことができなくなっている。そこで、電子図書館が実現されれば、検索から閲覧までコンピュータの画面上で出来るようになり、いながらにしてさまざまな情報を得ることができるようになるであろう。しかし、従来なら雑誌のページをめくりながら専門外の記事も読んでみたり、図や絵などで印象づけられたりしたが、そのようなことは望めなくなるであろう。これらを克服するために論文形式を見直す必要があるのではないだろうか。従来の序論、本論、結論というような論文形式は紙を媒体としたとき適当であったが、現在はオンラインジャーナルなどメディアは紙から電子媒体へと変化しつつある。このとき、本当に従来の論文形式で良いのかどうか考える必要がある。

例えば、まず概要だけがあり、詳しく知りたいところを指摘すればその内容が瞬時に得られるようなハイパーテキスト化された論文形式やさらに進んで論理関係だけからなるプログラム言語のような記号化された論文形式などのほうが電子化された論文には向いているかもしれな

い。これらが実現し、さらに論文作成ツールが整備されれば書く側の負担も軽減されるであろうし、書く側と読む側が同じ言語である必要もなくなる。また、早く内容が把握でき読む側の負担も軽減されブラウジングしやすくなるのではないか。しかし、書くのが簡単になればますます情報量が多くなるかも知れない。情報の洪水を防ぐには、情報発信者である研究者が如何にうまく整理して情報を発信するか、情報を提供する図書館が如何にうまくそれらを集約するかを考えないとこのままでは折角の情報が埋もれてしまい、研究はもっぱら情報の発掘調査に

終わるということにもなりかねない。

4. おわりに

情報を発信するのも、整理するのも、それを利用するのも所詮は人間である。情報インフラが整備されても、非整備されればされるほどそれを専門知識をもった図書館員やそれを利用する研究者が上手に使いこなさないと便利になるはずのシステム近代化が逆効果になりかねない。このような時代を迎えて、教官や図書館員の力量が問われているのではなかろうか。

図書館職員長期研修に参加して

国際日本文化研究センター資料課資料利用係長

今井 淑子 (元附属図書館情報管理課)

1. はじめに

平成7年度文部省図書館職員長期研修に参加しました。全国の国公立大学から集まった図書館職員が7月10日から3週間の間、東京及び筑波で講義や実習に汗を流しました。大変忙しいなかを、



送り出してくださった附属図書館の皆さんに深く感謝します。ありがとうございました。宿題のレポートに少し手を加え報告に代えさせていただきます。

長期研修の中で「京都大学」の名前があちこちで引用され、そのたびに身のすくむおもいをしました。いわく、「資料の分散は最悪」「たこつば組織」「知識の棺桶」などなど。なにかと話題になることの多い京都大学ですが、その組織形態は「調整された分散」という言葉で表現されてきました。その歴史をふりかえり「大学改革における図書館の対応」というテーマを考え

てみたいと思います。

2. 「調整された分散」のできるまで

京都大学図書館が設立されてもうすぐ100年をむかえます。『京都大学七十年史』を読んでもと、くり返し図書館組織のありかたについて改革が試みられた末に、やっとたどりついたのがこの「調整された分散」であることがよくわかります。

1887年「設立の暁にはむろん公開、誰人にも閲覧の便利をあたえ、我国西部の必要に応ずべし」との意気込みで設立された図書館の組織改革は1913年に始まっています。

「第9回商議会には総長臨席のもと、同総長のかねてよりの腹案であった本館への図書と事務の集中化について議論された。これは各学部、研究室には研究上不可欠の文献のみを置き、他の図書は可能なかぎり本館に集中することにより、収書と整理に合理的効果を与えようとするものである」と。

しかし、この提案は「結論をみるに至らず」